

山部赤人の応詔歌

——吉野讃歌としての特質——

はじめに

万葉集第三期を代表する宮廷歌人山部赤人は、三組の吉野讃歌を創作している。その中で創作年次が題詞に記録されている吉野讃歌がある。一般論として赤人の歌は、作歌年次が記録されていなかったらしく、年代がはっきりしないので、編集者にとってはどこに載せて良いのか、判断に苦しみ場合も多々あったらしい。神亀元年か、はたまた神亀二年か、卷六・九二三番から九二七番の吉野讃歌は、創作年代に疑問が生じている。しかし、これから考察する吉野讃歌は、題詞に年月が天平八年六月と明確に記されている、かつ赤人の全四十九首中で唯一の応詔歌（長短二首）である。

森

斌

八年丙子の夏六月、吉野の離宮に幸しし時に、山部宿禰赤人の、詔に応へて作れる歌一首并せて短歌やすみしし わご大君の 見し給ふ 吉野の宮は 山高み 雲そたな引く 川速み 瀬の音そ清き 神さびて 見れば貴く 宣しなへ 見れば清けし この山の 尽きばのみこそ この川の 耐えばのみこそ ももしきの 大宮所 止む時もあらめ（一〇〇五）

反歌

神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ（一〇〇六）

天平八年と題詞にあるが、赤人の創作年代が根拠を示して推定出来る最も新しい歌である。そして、これら十九句からなる長歌と反歌一首で構成された吉野讃歌の特質から

考えたい問題は、赤人の応詔歌と従駕歌とは本質的な相違があるのか、また五位にも充たなかった赤人に応詔という機会があつたのであろうか、ということである。

一、応 詔 歌

万葉集から題詞・左注等から確実に応詔歌と考えて良いのは、次に示す①から⑮までの例である。

①長忌寸意吉麻呂の詔に応へたる歌一首（三・二三八 題詞）

②暮春の月に芳野の離宮に幸しし時に、中納言大伴卿の勅を奉りて作れる歌一首（三・三一五 題詞）

③六年甲戌に、海犬養宿禰岡麻呂の、詔に応へたる歌一首（六・九九六 題詞）

④右の一首は、住吉の浜に遊覧して、宮に還り給ひし時に、道の上にて、守部王の詔に応へて作れる歌なり。

（六・九九九 左注）

⑤八年丙子の夏六月、吉野の離宮に幸しし時に、山部宿禰赤人の、詔に応へて作れる歌一首（六・一〇〇五 題詞）

⑥橘宿禰奈良麻呂の、詔に応へたる歌一首（六・一〇一

○ 題詞

⑦右の一首は、山上臣憶良の類聚歌林に曰く「長忌寸意吉麻呂、詔に応へてこの歌を作る」といへり。（九・一六七三 左注）

⑧十八年の正月に、白雪多に降りて、地に積むこと数寸なりき。時に、左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣と諸王臣等とを率て、太上天皇の御在所〔中宮の西院〕に参入りて、掃雪に供へ奉りき。ここに詔を降して、大臣参議と諸王とは、大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は南の細殿に侍はしめたまひて、すなわち酒を賜ひて肆宴したまふ。勅して曰く「汝諸王卿等、聊かにこの雪を賦して各々その歌を奏せ」とのりたまふ。（十七・三九二二 序）

左大臣橘宿禰の、詔に応へたる歌一首（三九二二 題詞）

紀朝臣清人の、詔に応へたる歌一首（三九二三 題詞）

紀朝臣男梶の、詔に応へたる歌一首（三九二四 題詞）

葛井連諸会の、詔に応へたる歌一首（三九二五 題詞）

大伴宿禰家持の、詔に応へたる歌一首（三九二六 題詞）

藤原豊成朝臣、巨勢奈良麻呂朝臣、大伴牛養宿禰、藤

原仲麻呂朝臣、三原王、智奴王、船王、邑知王、小田王、林王、穗積朝臣老、小治田朝臣諸人、小野朝臣綱手、高橋朝臣国足、太朝臣德太理、高丘連河内、秦忌寸朝元、檜原造東人。

右の件の王卿等、詔に应へて歌を作り、次によりて奏しき。登時その歌を記さずして漏失せり。ただ秦忌寸朝元は、左大臣橘卿諱れて云はく「歌を賦するに堪へずは麝を以ちて贖へ」といへり。此に因りて黙已をりき。(三九二六 左注)

⑨京に向かふ路の上にして、興に依りてかねて作れる侍宴应詔の歌一首(十九・四二五四 題詞)

⑩詔に应へむが為に、儲けて作れる歌一首(十九・四二五六 題詞)

⑪二十五日に、新嘗会の肆宴にして、詔に应へたる歌六首(十九・四二七三 題詞〔作者 巨勢奈弓麻呂 石川年足 文室智努 藤原八束 藤原永手 大伴家持〕)

⑫舍人親王の、詔に应へて和へ奉れる歌一首(二十・四二九四 題詞)

⑬薛妙観の、詔に应へて和へ奉れる歌一首(二十・四四三八 題詞)

⑭冬の日に靱負の御井に幸しし時に、内命婦石川朝臣の

詔に应へて雪を賦める歌一首(二十・四四三九 題詞)

⑮二年の春正月三日に、侍従・堅子・王臣等を召して、内裏の東の屋の垣下に侍はしめ、即ち玉箸を賜ひて肆宴しき。時に内相藤原朝臣勅を奉りて、宣はく「諸王卿等、堪ふるまにま、意に任せて、歌を作り并せて詩を賦め」とのりたまへり。仍りて詔旨に应へ、各々心緒を陳べて歌を作り詩を賦めり。「いまだ諸人の賦める詩と作れる歌とを得ず」(二十・四四九三 序)

万葉集の中から「应詔」「奉勅」「应詔旨」という言葉を題詞・左注と序から歌番号順に示した。用例としては、①から⑮までであるが、奉勅は②、应詔旨は⑮がその例であり、残る十三例は「应詔」と言うことになる。そこで应詔、奉勅、应詔旨を含めてかかる題詞や左注等をもつものを应詔歌と呼称する。また、①と⑦の長意吉麻呂の例が、持統・文武朝に創作されているのであろう。その他は天平六年から天平宝字二年までに作られた应詔歌と言うことになる。しかも、年代が天平に入ってからのは应詔歌でいわゆる五位以上の官人と呼称される中では、赤人が例外的に六位以下の微官である。

まず、应詔歌については、小野寛氏、城陽子氏、太田豊

明氏等にすぐれた論考がある。小野氏は、即興性に応詔歌の本質を考えた。^①城陽子氏は、応詔歌の系譜が応詔詩から流れてきたことを明確にした。^②太田氏は、即興性と遊樂性を基本として、宮廷歌人の応詔歌と五位以上の官人のそれとは同質にできないとする。^③即ち、宮廷歌人が応詔歌をうたうことは、身分のある官人集団の外にいたのであつて、「宴の外部」にいる存在だとする。ここで問題になるのは、^④⑦長意吉麻呂と⑤山部赤人が五位に充たない官吏であつたことである。

そこで応詔と言えば、応詔詩から応詔歌という展開が考えられるのであるから、参考にしなければならぬのは、懷風藻である。懷風藻の作者は、ほとんどが身分ある貴族である。但し、例外として応詔詩とありながら六位であつた人物が大学博士田辺百枝である。懷風藻では大学博士は、大学博士従五位下美努淨麻呂、大学博士従五位下刀利康嗣、正五位上大学博士守部大隅等がいる。田辺百枝も五位に昇任する事がなかったとしても、第一級の知識人であり、博学知識であつたから、五位に準ずる例外だったのかも知れない。

万葉集の応詔歌人は、意吉麻呂と赤人とを除き等しく五位以上である。勿論、橘奈良麻呂は、左大臣の子息という

ことでここでは無位であつたとしても、また^⑤の例に「豎子」という言葉が未冠の少年を意味しているので、応詔歌は当然のことなのであろう。

この中で注目されるのは、まず^②である。ちなみに応詔歌であり、且つ万葉集に記録された吉野讃歌は、山部赤人、大伴旅人の作品のみである。なお旅人の作は、公的に披露されることがなつた。旅人の歌を引用すれば左記の如くである。

み吉野の 芳野の宮は 山柄し 貴くあらし 川柄し
清けくあらし 天地と 長く久しく 万代に 変らず
あらむ 行幸の宮 (三一五)

反歌

昔見し象の小河を今見ればいよ清けくなりけるか
も (三一六)

十一句からなる長歌の原文には「山水」「天地」「長久」「万代」「不改」「行幸」等の漢語を駆使して賛仰を表現している。歌の中心は吉野の宮が永遠に栄える、とうたうことにある。「長く」「久しく」「万代に」「変わらず」等は、山と川の宜しい吉野の宮が永久に栄えることを強調するた

めに繰り返している。

山と川を対にして吉野の神聖な自然を描きながら、旅人も人麻呂の吉野讃歌の「山川の 清き河内」(二・三六)に基づく伝統的な立場から歌をものしている。しかし、奏上されなかったことは題詞によつて知られるのであるが、予め創作すると言うことは、詔が突然に発せられて歌が要請されることもあるからであらうか。或いは歌を作る要請が予想される場合であれば、勿論予め準備して置くことも可能であり、かかる場合奏上が中止になれば旅人と同様に備忘録として記録が残る。しかし、公表されなかったのであるから、はたして旅人の場合応詔歌と認定して良いのであらうか。また、家持は国守の任期が終わり、京に上京する途中に宮中でのお宴で歌を求められることを予想した⑨、都でも宴席で讃歌を求める聖武天皇の詔を想像した⑩の例もある。

さて、応詔歌は、如何なる事情の時に生まれるのであらうか。そこで参考にしたのが⑧⑭⑮の例である。

まず⑧の三九二二番の題詞に依れば、天平十八年正月に雪が沢山降り積もったので、左大臣橘諸兄をはじめ諸王臣等が元正太上天皇の御在所の雪かきに奉仕した。そこで太上天皇が酒宴を催され、時に「聊かにこの雪を賦して」

各々歌を作ることが命じられ、官人達は詔にそれぞれ応えている。万葉に記録されているのは、五人五首であるが、その他に十八人の名前が記され、それらの記録が漏れたことを三九二六番の左注で明らかにしている。ここの応詔歌は、予め予想出来ると言うよりも、大雪により歌を作る突発的な場が生まれたことに依る。

⑭の例では、題詞に応詔歌であることが明示されているが、歌の創作事情は左注に詳しい。水主内親王が病氣のため寝食もままならなかったので、元正上皇が「水主内親王に遣らむために雪を賦みて歌を作りて奉献れ」と言われ、石川命婦が一人歌を作り応えたのである。この場合でも、思いつきであるから、直ちに反応して諸人が歌を詠めなかったのである。

⑮の例では、天平宝字二年正月二日に、天皇近侍の臣や少年、或いは王と廷臣に玉箒を下されて、「堪ふるまにま、意に任せて、歌を作り并せて詩を賦め」という詔があった。左注にその時の詩歌は、求め得られないが家持が作った歌は、仕事があつて奏上出来なかった、とある。年中行事に関わる詔が出ることは、予想されることであるが、常に詔が出されるわけではないのであらうから、突発的な出来事とも考えられる。

このように見てきた時、第一に応詔歌が改めて聖武天皇の天平年間以降に盛んになっていったことが知られる。また、新嘗祭や正月行事等では、予め歌を要請する詔が予想される場合もあるが、むしろ突然詔が下され、そして歌の題目も指示されていた、と考えたい。歌の内容は、勿論「雪」が主題であれば、それにそう内容の歌のみで、例外的なものがない。かかる性格を持つ応詔歌とは、太田豊明氏は、「即興性と遊楽性」を指摘し、宮廷歌人の作品の「儀礼性」を旨とする作品との質の違いを示唆しているが、旅人の応詔吉野讃歌で遊楽性を指摘することは難しい。それは、山川の宜しき聖地吉野を描き、賛仰の表現にすることが、既に伝統になっていて、遊楽性がうたわれにくかったのかも知れない。旅人の吉野讃歌は奏上されずに万葉集に記録された。そこにあるのは、吉野が神聖な土地であることの賛美をテーマとしている。そのテーマと表現が伝統の範疇にとどまるものであるだけに即興で作られた安易さは、認められるし、それ故に儀礼性もある。伝統に忠実であることは、作法を大切にする儀礼の根本である。そこで次に問題にしたいのは、赤人天平八年の吉野讃歌の特質である。

二、吉野讃歌

聖武天皇は、神亀元年、二年、そして天平八年の吉野行幸を試みられた。赤人には、聖武天皇の御代である神亀年間に吉野讃歌をよむ機会があった。清水克彦氏や吉井巖氏が支持する神亀元年三月説と神亀二年五月説があるが、いずれにせよ聖武天皇に付き従って吉野行幸従駕の折りに讃歌を作っていた。長短三首と長短二首でそれぞれが一組になっていて、なお一組に「馬並めて 御獵ぞ立たす 春の茂野に」(九二六)とあるので、春という季節感を見逃さない、とする坂本信幸氏の支持もある。その立場からは、神亀元年春三月に行われた吉野行幸で作られたとする説が有力になる。しかし、赤人の吉野讃歌における写真は、どの程度季節を配慮すべきなのであろうか。対句に依る景物の展開は、赤人の最も得意とする創作方法でもあり、美しく破綻の見られない構成が極めて抽象的でもあり、事実と単純に置き換え出来ない。対句による構成美から季節感を指摘できるとしても、それはどこまで現実を反映しているのか、判断に苦しむのであえて万葉集の編纂者に異議を立てる根拠もないのであるまいか。やはり、ここでは巻六の構成に従い、これらの吉野讃歌は神亀二年五月

の詠作と見なしたい。赤人の初めて作った吉野讃歌は、次のⅠとⅡである。

Ⅰ

山部宿祢赤人の作れる歌二首并せて短歌

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は 暈
づく 青垣隠り 川次の 清き 河内そ 春べは 花
咲きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いや
ますますに この川の 絶ゆること無く ももしきの
大宮人は 常に通はむ (六・九二三)

反歌二首

み吉野の象山の際の木末にはここだもさわく鳥の声か
も (六・九二四)

ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き川原に千鳥
しば鳴く (六・九二五)

Ⅱ

やすみしし わご大君は み吉野の 秋津の小野に
野の上には 跡見すゑ置きて み山には 射目立て渡
し 朝獵に 鹿猪履み起し 夕狩に 鳥踏み立て 馬
並めて 御獵ぞ立たす 春の茂野に (六・九二六)

反歌

あしひきの山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動きた

り見ゆ (六・九二七)

これらⅠとⅡの吉野讃歌では、とりわけⅠの九二三番と
一〇〇五番の比較が試みられて良い。即ち、九二三番と一
〇〇五番とは、共に十九句からなる長歌の構造が近似する
からである。はじめに「やすみしし わご大君 (の)
(は)」という歌語が吉野讃歌三首の共通した歌語である
が、さらに長歌全体の構成についても、小野寛氏は、
『……は』型(吉野型)と呼称して、とりわけ九二三番と
一〇〇五番の類似を指摘する⁽⁷⁾。その類似の根本は、山と川
が対になって展開するからである。

九二三番

(山) 暈づく

青垣隠り

(川) 川次の

清き河内そ

(山) 春べは

花咲きををり

(川) 秋されば

霧立ち渡る

一〇〇五番

(山) 山高み

雲そたな引く

(川) 川速み

瀬の音を清き

(山) 神さびて

見れば貴き

(川) 宣しなへ

見れば清けし

(山) その山の

(山) この山の

いやすますに

尽きばのみこそ

(川) この川の

(川) この川の

絶ゆること無く

絶えばのみこそ

もしきの 大宮人は

もしきの 大宮所

常に通はむ(結束部)

止む時もあらめ(結束部)

ちなみに天平八年の応詔吉野讃歌と神亀の吉野讃歌九二三番は、共通した内容がある。まず、初句・第二句の「やすみしし わご大君は(の)」と長歌の冒頭があることである。赤人は、十三首の長歌を作っているが、「やすみしし わご大君は(の)」で始まる歌は、三首の吉野讃歌を除き神亀元年十月の紀伊行幸の従駕歌(六・九一七)と神亀三年九月に印南野行幸の従駕歌(六・九三八)とである。ちなみに柿本人麻呂の吉野讃歌で「やすみしし 吾が大君の」(一・三六、三八)と冒頭が始まるが、その他の長歌では長皇子が狛路池で遊びの折りに作られた卷三・二二三九番が「やすみしし 吾大君」とある三首の用例である。勿論、雄略記の歌謡等の伝統に基づき額田王(二・一五五)、間人連老(一・三)が長歌に取り入れた表現である。そして、さ

らに人麻呂が天皇を賛仰するために用いた表現と言うべきであるが、第三期の宮廷歌人では赤人のみに継承された。赤人が吉野讃歌を作るに際して、人麻呂の吉野讃歌を意識していたことがここからも知られる。

さて、全体が十九句から成る赤人長歌の冒頭二句が共通した天皇賛仰で始まり、結束部の三句が「もしきの 大宮人は 常に通はむ」(九二三)と「もしきの 大宮所止む時もあらめ」(二〇〇五)とある。即ち、大宮人が永久に通う、そして大宮所が永遠である、とうたうのである。しかも、赤人長歌ではたつた二首のみに見られる末三句が名詞止めや、倒置法等を用いないで率直に結ぶのである。さらに三連の二句対を対照させる時、一〇〇五番は九二三番とほぼ類似した内容と同じ構成であることが確認される。天平八年という年代の知られる赤人作品で最も新しい一〇〇五番が応詔という機会に作られたにせよ、その長歌構成の根本は、神亀二年の聖武天皇吉野行幸で作られた従駕歌と長歌の対句による描写の展開ということからは、極めて類似した作品である。

しかし、そこを詳しく比較する時、一〇〇五番には「見し」が一例、「見れ」が二例用いられている。「見し給ふ」は、天皇が支配されている意味で用いているが、九二三番

で「高知らす」とある句に対応している。ここに「見」に対する積極的な態度が伺われる。

また「見れば貴し」「見れば清し」に匹敵する言葉は、九二三番には無い。そもそも天武天皇の御製に、

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよ
き人よく見つ（一・二七）

とあって、そこには「見る」が三例使用されている。しかも「よし」に「吉（野）」の地名が掛詞になり、さらに「見（御）吉野」までもが予想されそうである。この見る吉野というほめ言葉を人麻呂は、「見れど飽かぬ（かも）」としてうたう。この人麻呂吉野讃歌における「見る」ことの賛美表現を、坂本信幸氏はその後の吉野讃歌に決定的な影響を与えているとして⁽⁸⁾いる。

吉野の宮に幸しし時に、柿本朝臣人麻呂の作れる
歌

やすみしし わご大君の 聞こし食す 天の下に 国
はしも 多にあれども 山川の 清き河内と 御心を
吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷き

ませば 百磯城の 大宮人は 船並めて 朝川渡り
舟競ひ 夕河渡る この川の 絶ゆることなく この
山の いや高しらす 水激つ 滝の都は 見れど飽か
ぬかも（一・三六）

反歌

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還
り見つ（一・三七）

引用した二十七句からなる人麻呂吉野讃歌（三六）と赤人吉野讃歌（九二三）との比較は、夙に試みられているが、赤人の表現はほとんどが人麻呂に類似している。ちなみに小野寛氏は、赤人歌の十九句中で十六句が人麻呂吉野讃歌の類句とする⁽⁹⁾。この類似表現の一番厳しい評価は吉井巖氏である。「明快、均斉、秩序ある構成ということが、この作品の優れた点としてとりあげられる場合が多い。だがそれを私は文学の本質的なものと考えない」として、「器用にまとめあげられた職人芸的作品」とした。

天平八年の赤人吉野讃歌と引用した人麻呂吉野讃歌の類似表現はどうであろうか。語句の類似を比較する立場からすると、一〇〇五番は九二三番程人麻呂吉野讃歌に接近していないが、類似句の対照を示せば次の如くで、十二句が

近似した表現である。

一〇〇五

やすみしし わご大君の
山高み 雲そたな引く
川速み 瀬の音そ清き
神さびて 見れば貴く

三六

やすみしし わご大君の
この山の いや高知らす
山川の 清き河内と
神ながら

神さびせすと(三八)

この山の

この山の いや高知らす

尽きばのみこそ

この川の

この川の 絶ゆることなく

耐えばのみこそ

むしろ「見る」ことの復活ということでは、一〇〇五番は拘りを見せていた。「見し給ふ」と吉野の宮を提示し、さらに「見れば貴し」「見れば清けし」と繰り返して山と川とを讃えている。この見ることの復活は、人麻呂吉野讃歌の類似であると同時に、赤人の同時代の歌人笠金村の吉野讃歌との類似を暗示する。

金村は養老七年の元正天皇行幸に従駕して吉野讃歌(六・九〇七〜九〇八)をうたっている。又、聖武天皇行幸

の神亀二年にも金村は、吉野讃歌(六・九二〇〜九二二)を作っている。どちらの作にも「国柄か 見が欲しからむ」(九〇七)「毎年にかくも見てしか」(九〇八)「激つ河内は見れど飽かぬかも」(九〇九)、「川の瀬の 清きを見れば」(九二〇)「繁にしあれば 見るごとに」(九二〇)「万代に見とも飽かめや」(九二二)とあって、そこには見ることが強調されている。しかも、金村の歌の「見る」主体は、大宮人である。赤人一〇〇五番も「見る」主体は、大宮人である。

ところが、養老七年に車千年の作った吉野讃歌(六・九一三、九一四)では、

……紐解かぬ 旅にしあれば 吾のみして 清き川原
を 見らくし惜しも(九一三)

とあって、「見る」主体は妻が此処にいない夫になっている。さらに或本の反歌として、

千鳥鳴くみ吉野川の川音なる止む時無しに思ほゆる君
(六・九一五)

とあるが、これでは恋歌である。

従駕歌が相聞的になることは、従来から指摘されていたが、吉野讃歌の伝統から言えば、車持千年から始まったことになる。赤人の神亀二年の吉野讃歌Ⅰは、相聞的な性格を指摘できないし、そして人麻呂作品の影響が強いと言いつながら、鳥を効果的に用い、見ることを排除し、さらに対句による展開等に赤人の個性が認められる。Ⅱはさらに素材そのものが吉野讃歌中で際だっている。結び三句「馬並めて御獵ぞ立たす 春の茂野に」は、人麻呂が軽皇子の安騎野での御獵に詠んだ反歌、

日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向かふ
(一・四九)

の影響が認められる。しかも、獵という素材もさることながら、大君の行為を描写することが主眼になっていて、笠金村以降の吉野讃歌中で、九二六番と九二七番は出色の出来映えである。

三、「あり通ふ」と「見る」

ところで、赤人は、十三首の長歌を万葉に残していた。それら長歌の結尾部三句を示せば、左記の如くである。

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

(三・三一七)

遠き代に 神さびゆかむ 行幸処 (三・三二二)

見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば (三・三三四)

立ちてゐて 思ひそわがする 逢はぬ児ゆゑに

(三・三七二)

言のみも 名のみもわれは 忘らえなくに

(三・四三二)

神代より 然ぞ尊き 玉津島山 (六・九一七)

ももしきの 大宮人は 常に通はむ (六・九二二)

馬並めて 御獵ぞ立たす 春の茂野に (六・九二六)

船並めて 仕へまつるし 貴し見れば (六・九三三)

在り通ひ 見ますもしるし 清き白浜 (六・九三八)

隅も置かず 思ひそ吾が来る 旅の日長み

(六・九四二)

間使も 遣らずてわれは 生けりともなし

(六・九四六)

もしきの 大宮所 止む時もあらめ (六・一〇〇五)

これらの結末部を見た時、長歌という公的な性格もあり、また挽歌一例を除きその他が雑歌であるということもあるが、儀礼的な、或いは讃歌的な、そして伝統となつた表現が目立つ。但し、典型的な相聞の内容がある三七二番については、特別個性的な表現は指摘できないにしても、全く類型とする連続する三句の表現はない。また、四三一番は、「言」と「名」を対にしていることが挽歌として斬新である。噂や名前は、恋の障害として普遍的なものであったらしいが、赤人の万葉集に残した唯一の挽歌で用いているところに創意がある、と考える。これらの結末部を比較しても、他の歌に指摘できない吉野讃歌として表現の類似が九二三番と一〇〇五番とには見られる。結び三句の共通部が「もしきの 大宮」までであり、非共通部が「人は常に通はむ」「所 止む時もあらめ」というのであるが、言いたい内容は人であれば永久に吉野に通い、大宮のある土地であれば永久に失せることがない、と言うことである。一〇〇五番の結びで直接吉野に常に通うとうたわれてい

いが、一〇〇六番の反歌では、「神代より吉野の宮にあり通ひ」とよまれている。結局赤人の吉野讃歌は、宮廷人が常に大宮に通う、とうたうことで基本的に賛仰の精神を表現する。

この赤人が吉野讃歌に用いた「常に通はむ」(九二三)、「あり通ひ」(一〇〇六)を考察したい。但し、「常に通ふ」は、赤人の一例のみであるので、「あり通ふ」の用例が参考になる。例えば、人麻呂は築紫国に行く海路で、

大君の遠の朝廷とあり通ふ鳥門を見れば神代し思ほゆ
(三・三〇四)

とうたい、また憶良は、持統四年の紀伊行幸に従駕していたのであろうか、有間皇子の結び松を見て、

天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知る
らむ (二・一四五)

とうたっている。

さて、赤人の「常に通はむ」と「あり通ひ」とは、人麻呂吉野讃歌の本質と関わる類似の句と言うのであれば、「見

れど飽かぬかも」(三六)、「絶ゆることなくまた還り見む」(三七)という表現が比較対照として当てはまるであろう。ちなみに、養老七年の金村吉野讃歌では、反歌と或本の反歌で、

山高み白木綿花に落ち激つ滝の河内は見れど飽かぬかも(九〇九)

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまた還り見む(九一一)

とあり、さらに神亀二年五月の吉野讃歌の反歌で、

万代に見とも飽かめやみ吉野の激つ河内の大宮所(九二二)

と、うたう。

まさしく人麻呂吉野讃歌の本質である見て誉めることが、この金村が庶幾した伝統である。やはり同時代の歌人でも、吉野讃歌をうたった車持千年は、長歌の結東部で「吾のみして 清き川原を 見らくし惜しも」(九一三)と

にある。「見る」ことは、赤人が神亀年間に作った吉野讃歌Ⅱにも一例ある。

あしひきの山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動きたり見ゆ(九二七)

この反歌に用いられた「見る」とは、御獵に参加している人が入り乱れていることが見えるというのであつて、「見れど飽かぬ」「また還り見む」という「見る」と異なる。即ち、吉野讃歌の「見る」とは、人麻呂や金村等が誉め称えるために見るか、見て賛美するかである。赤人の見ることは、人が散開しているのが見えるのであつて、賛仰の直接表現ではない。従つて、赤人吉野讃歌ⅠもⅡも、誉め称えるための見ることを切り捨てて、通うことに讃歌の本質を託したのである。

赤人は、神亀二年の吉野讃歌の賛仰の精神を「見る」ことを切り捨てた「通ふ」に表した。ところが、赤人以降の歌人では、「あり通ふ」の用例は、田辺福麻呂、境部老麻呂、大伴家持等に見られる。そこで讃歌の用例のみ取り上げれば、次の如くである。

① 田辺福麻呂

やすみしし わご大君は あり通ふ 難波の宮は……
見る人の 語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする
(六・一〇六二)

あり通ふ難波の宮は海近み漁童女らが乗れる船見ゆ
(六・一〇六三)

② 境部老麻呂

山背の 久邇の都は……あり通ひ 仕へまつらむ 万
代までに (十七・三九〇七)

③ 大伴家持

み吉野の この大宮に あり通ひ 見し給ふらし (十
八・四〇九八)

古を思ほすらしもわご大君吉野の宮をあり通ひ見す
(十八・四〇九九)

①は、天平十六年に久邇京が廃止され、難波が皇都になつてゐるから、それからほどなく誕生した作品であらう。田辺福麻呂の通うの用例も見るといふことと結びつく。赤人に近いのは、②である。その②は、久邇京が天平十二年に遷都してゐるが、左注には翌十三年二月に右馬頭境部老麻呂のうたである、と記す。また、③は天平感宝元年

五月、越中の守の館で作られたのであらう。家持の吉野讃歌には、見ることがやはり強調されている。即ち、これら長短三首は、それぞれ「見る」が用いられていて、「あり通ひ 見し給ふらし」(四〇九八)「吉野の宮をあり通ひ見す」(四〇九九)とあり、さらに第二短歌にも「絶ゆることなく仕へつつ見む」(四〇九九)とある。長歌と第一短歌は、見る主体が大君である。第二短歌は、見る主体が大宮人である。天皇も官人達も見ることにより、吉野に常に通うのである。ここに家持の吉野讃歌の本質がある。

吉野讃歌の伝統の一つに「見る」と言うことがある。赤人は見るを用いない吉野讃歌を神亀二年に創作していた。ところが、天平八年の応詔吉野讃歌では、また伝統に戻つてしまふ。見るが長歌に「見し給ふ 吉野の宮は」「神さびて 見れば貴く」「宜しなへ 見れば清けし」と三例を数える。人麻呂の伝統に基づきながら、御獵という素材を、そして徹底した対句表現の完成を試みたのが従駕歌における神亀二年の吉野讃歌とすれば、応詔吉野讃歌は、より伝統に埋没させてしまふことに手柄があつたのかも知れない。

四、山 と 川

赤人吉野讃歌の特徴の一つは、神亀二年と天平八年の比較で知られる限り、吉野歌の伝統である見るの切り捨てと復活にあった。では独自性は、天平八年の作品にさらに指摘できないのであろうか。清水克彦氏は、反実仮想の表現を指摘する。^①「……この山の 尽きがのみこそ この川の 絶えばのみこそ ももしきの 大宮所 止む時もあらめ」(二〇〇五)と長歌が結ばれている。ここの反実仮想の表現は、それをあり得ない否定の形で山が無くなる、川が絶えるのであるなら、という事実と反することを仮定している。但し、反実仮想の表現というのであれば、万葉集の相聞と挽歌に散見する。巻二に限定して相聞・挽歌から一首ずつ歌を示せば、つぎの例などが適当であろう。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死な
ましものを (八六)

かからむの懐知りせば大御船泊し泊りに標結はましを
(二五二)

赤人が試みた表現とは、永遠であるもの、或いは普遍で

あるものを否定して、本来有限であるものを普遍である、と述べている。そこに反実仮想と言いながら、赤人の表現は、万葉一般の例とは異なる。むしろ赤人が反実仮想でうたった世界を率直に表現したのが大伴旅人である。神亀元年三月に聖武天皇が吉野に行幸した。奏上することがなかったが、旅人が「勅を奉りて作れる」歌(三・三二五)として詠んだ長歌には、吉野の宮が「山柄し 貴くあらし 川柄し 清けくあらし 天地と 長く久しく 万代に 変わらずあらむ 行幸の宮」であるとうたう。

この長歌の第七句「天地と」以下に展開する叙情は、宮を誉める常套の表現であるが、天地という永遠であるものを提示して、宮も長久のものである、と言挙げした。このまさに永久のものを例にして、限りあるものもかくありたいと願う表現形式が常識なのであって、赤人の反実仮想は、これまでの讃歌に見られない異質なものである。赤人の普遍的な存在を否定して、有限の存在を無限に昇華させてしまうということは、反実仮想と言いながらも特殊な表現であった。この特殊な発想とは非雑歌的表現である。従来に行幸従駕歌が相聞的な表現に接近して行くことが笠金村以降の宮廷歌人の歌に指摘されていた。ところが、極めて特殊な表現の普遍、乃至無限のものを反実仮想として否

定して、限りあるものを無限の存在に想像することの一番意味ある言葉の創作とは、挽歌や相聞という人間の死と愛であろう。反実仮想の発想の歌を、巻二、巻三に記録された挽歌や相聞歌から例を取り上げることが、極めて容易なことである。

ところで、巻七の「河に寄せたる」歌の一首に、

泊瀬川流る水沫の絶えばこそわが思ふ心遂げじと思は
め（七・一三八二）

とあって、あり得ないことを仮定して、だから川の水沫が絶えないのであるから思いも遂げるのである、と決意を述べた一首がある。

この巻七の「河に寄せたる」歌群六首には、「絶えずゆく明日香の川」（一三七九）、「山川激つ情」（一三八三）、「早川の瀬には立つとも」（一三八四）と言うように、川の水の速い流れに寄せた表現がある。人麻呂の吉野讃歌にも「水激つ」（三八）、「激つ河内」（三八、三九）とあり、同様に笠金村の吉野讃歌に「清き河内の激つ白波」（九〇八）「落ち激つ」（九〇九、九二〇）「激つ河内」（九二二）とある。車持千年の吉野讃歌には、川の激しい流れや水の速い流れ

を表現する言葉がないし、同様に神亀の赤人の吉野讃歌も清い河内や水の流れの絶えないことをうたっている。人麻呂や金村の「激つ」に対応する表現がない。

しかし、天平の赤人吉野讃歌には、「川早み 瀬の音を清き」（二〇〇五）という表現が試みられ、水の流れの速いが為に浅瀬の音が清らかに音をたてるといふ。人麻呂や金村の吉野讃歌には、激しく流れる水に聖なる吉野を捉えていたのであるが、千年も赤人も川の聖性には「激つ」は必要なかった。但し、赤人は、天平の讃歌では川の流れの速さも取り入れていたのである。

一方聖武天皇時代の吉野讃歌の描写で人麻呂の吉野讃歌と異なるのは、天皇の行動に主体を置いて、さらに狩猟を主題とする九二六番と九二七番の吉野讃歌を除き、山の雲と川の霧、そして鳥の登場である。

吉野歌で鳥が登場するのは、弓削皇子と額田王の贈答における霍公鳥（二・一一一、一二二）、高市黒人の呼子鳥（二・七〇）をはじめ、車持千年の或る本の歌（六・九五）に「千鳥数鳴き」とある。同様に吉野歌で山を形容する雲は、弓削皇子と春日王との贈答二首で「滝の上の三船の山に居る雲の」（三・二四二）「白雲も三船の山に」（三・二四三）とあ

り、さらに釈通観は「み吉野の高城の山に白雲は」(三・三五三)とうたう。赤人は、神亀の吉野歌で鳥と千鳥を、天平の吉野歌で雲を、それぞれ登場させた。ところが、鳥も雲も吉野歌では既に試みられていた表現であるが、赤人の独自性と言つて良いのが「秋霧」である。

人麻呂は、溺れ死んだ出雲娘子を吉野で火葬した時、「いさよふ雲」(三・四二八)と「霧なれや」(三・四二九)とを妹に仮想している。又、車持千年は養老七年の吉野讃歌で「み降せば 川の瀬ごとに 明け来れば 朝霧立ち」(六・九二三)と表現している。朝霧の生みの親は、千年であるが、しかし赤人は、「春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る」(九二三)とあつて、山の春花に対する川の秋霧を対照させて対句とした。

山と川の対句を展開させて行く手法は、神亀の九二三番も天平の一〇五番も構成からは等しい。しかし、九二三番は、春山に対応する為であろうが、秋霧が登場している。この霧を含めた秋の川と春の山は、赤人歌の特質になつていて、「神岳に登る」歌に、

……春の日は 山し見がほし 秋の夜は 川し清けし
朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 河蝦はさわく……(三・

とあつて、そこでは春の、昼間・山・朝雲・鶴、そして秋の、夜・川・夕霧・河蝦が対比されて展開している。

中西進氏は、春花が人麻呂によつて「春花の 貴からむと」(二・一六七)があるので、これを継承したとし、さらに「秋霧」が万葉集に見あたらないとして、赤人が秋の、しかも川霧を歌いだした、とする⁽¹²⁾。

赤人の神亀の吉野讃歌と天平の吉野讃歌の比較からは、人麻呂の模倣もそれなりであるが、やはりそこには赤人の絶え間ない工夫が試みられていたことを知る。しかも、これらの長歌は、構成が類似した物でありながら、一方では「鳥」「秋の霧」を登場させても、次には「雲」のみを生かす表現を試みたり、さらに坂本信幸氏の言う「見る」の切り捨てたのが不自然であつたのであろうか、機会が改たまる時に「見る」を積極的に試みたりしている⁽¹³⁾。但し、井上さやか氏が「典雅で文芸的な作品」と評価することには賛同できない⁽¹⁴⁾。

さて、ここに至れば赤人の神亀・天平吉野讃歌とは、見る、通う、居る等を用いても、常に、絶えず、変わらずと言うことが形容として加わるところで共通する。即ち、神

亀・天平の吉野歌に共通する精神は、吉野が常に継続して変わらずに存在することで、大宮人が永久に通うのである。

但し、赤人の吉野讃歌には、天皇がみ獵する姿に賛仰を表現した九二六番、九二七番があるが、これは人麻呂が三八番で「山川も 依りて仕ふる 神の御代かも」とあつて、聖地吉野よりも天皇の賛美に視点を向けていたのであるから、人麻呂吉野讃歌にその意味で近似しているし、素材、着想の点からもさらに評価されて良い。その赤人吉野讃歌を除き、笠金村、車持千年、赤人、旅人、家持いづれもが聖地吉野を描写する事で賛仰とする傾向がある。その意味でも、表現の伝統は、人麻呂に始まりながら、精神は人麻呂と人麻呂以後という二分して吉野讃歌が考えられるのである。

結 び

赤人は応詔歌を創作した。題詞に依れば天平八年の試みであつた。嘗て聖武天皇が吉野に行幸の折り、二組の従駕歌を作つていた。天平八年の応詔歌は、その一組に表現、構成が近似するものである。創作態度は、伝統に基づきながら、得意の対句展開で一首ものした。その特質として

は、有限のものを無限に見なすために、無限のものを反実仮想で表現する試みがある。次に、吉野歌が拘つてきた「見る」ことを伝統として庶幾した。また、川と山の宜しき吉野を確認することで賛仰を表現している。そこには、神亀二年に試みられた、春花と秋霧と言つた特徴的な対句は見られないが、より伝統的で没個性的な性格がある。

このように作品を理解してきたが、応詔歌と従駕歌の根本的な相違は、赤人歌に指摘できない。即興性、遊技性、と言うよりは、むしろよく熟慮していて、表現としては平板になつてゐるが、簡潔で明瞭である。むしろ饒舌を嫌い、得意な対句によつて描写の膨らみを試みていて、そこには個性を伺わせる叙述が展開している。但し、五位に充たなかつた赤人が何故に応詔歌を要請されたのか、赤人の吉野歌、また応詔歌の特質からは、やはり疑問が残る。

〈注〉

- (1) 「万葉応詔歌考」(『論集上代文学』 第十冊所収)
- (2) 「応詔歌の系譜——作歌年時の偏りに着目して——」(『國學院大學大学院紀要』 二十号)
- (3) 「山部赤人の応詔歌——宮廷歌人論として——」(『上代文学』 七十四号)

- (4) 注③に同じ。
- (5) 清水氏「赤人の吉野讃歌―作歌年月不審の作群について―」(『万葉』九十一号)
- 吉井氏『万葉集全注卷六』
- (6) 「赤人の吉野讃歌」(『国文学解釈と鑑賞』五十一卷二号)
- (7) 「山部赤人の長歌の構成」(『駒沢国文』十八号)
- (8) 「赤人の吉野」(『万葉』九十三号)
- (9) 「赤人の吉野讃歌」(『短歌』三十一卷十二号)
- (10) 『万葉集全注卷六』
- (11) 注⑤清水氏論文に同じ。
- (12) 「赤人の自然」(『成城万葉』十九号)
- (13) 注8に同じ。
- (14) 赤人の吉野歌―天平八年の從駕応詔歌をめぐって―(『中国国文学』十六号)